

Centimetres

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak
LICENSED PRODUCT

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black



上
四編

13
3077
10



特

へ13
3077
10

十二



花鳥月夜

深き海に花は散る 山桜花はさくらさくら

緑の葉はまはる 子に想ふ身は葉

像子に糸を巻く 中へ葉はまはる

人待たせ給ふ時 人の心は

所ふし心は 思ふ心は

心は 思ふ心は



歌謡は元祖多
びりの権勢

あー

おーの
おーも

あー

あー

あー

あー



あー



あー

花鳥風月第四編卷之上

東都

梅亭金鷲編次

比用と虫と提燈み帳面さげて疎子を雨戸産敷へ
 ぶらと帯りあがり腰の巻と抹巾一子、おあさん方の玉い
 何地ら何とら小名で度いませす子と少はてそ知に麻
 圃圃言旅人の天窓を揺あがり「吾儕う工台飯ハ」花
 香風月とらふかの初編二編の作者竹葉舎金瓶と



みるゆて
 をせう
 くらとて
 歌
 新
 以
 移
 香
 中
 芳
 晴
 画
 香
 中
 芳
 晴
 画
 香
 中
 芳
 晴
 画

よきまゝの老を以て人々をよそと云はば使ふまゝ一人かへて
処で自己のてしく京の六条珠敷屋町伝流屋久松
や一はまてらゐの酒屋おすし口うらまきせ茶室のひ方の
構えが松尾とてその名と虫籠筆書法と一人
と名集りまゝ隣りある彦交を明サテおあさん言
い玉折の何処で名いれとて山彦のまきエ下向見ては処
あゝ貞彦希がお柳と二人並の青い酒酌かき若さ
とくがお柳も山用と虫籠せり提燈の宮おらと會

新貞彦希へ幾由せんといふ可笑ひあはれ
あア平松の玉籠子の里伊貝根町の漢師で貞彦希
とパーやて「アウ」も方らの女中へお連の丸う思ひ二
人へお柳のまき子トまゝと帳面へ名あとしめは
あて性お柳へ後とえ送つてホンと酒臭つさあはれ
中様も小夢あて「山用」といふ探灯と燈で若きまゝ
官儀と揃へふ来んたやア会うと紙小崎り志士と
貞彦、彼いかに山彦のまきエ「宿屋」溜りしは処

の病で申えんが被指して宿込人が政り来りや
柳「ヤ 申でい宿込の宿屋小泊して居るこい出来申
新入トまじり教の色と如く也 何故出来宿屋の
申で申言めて逃て来このごう被指やして是れ
本町一言告の志も申んうと思ひまもさ 何
あの中ノ小男と食もさうして逃て来て言告ら
うもあしとて 柳「ア 申候ていひ申ん
こと思ひまもさ 何れ申候由申候をいひ

柳「それ 申候が捕りますとおあさん申候
申大うおお男へ紙で申つて申る申候
申候と申ひまもさサト申候に教習け涙む
恍惚子ら一頁の宿屋の笑ひあつて一虚とく業
り之今ノ宿屋人いんの通り一宿人捉さる人の
名をを帳面へ申来るのまア余申る苦勞より
申候で異るサ 何れ申候の申候人何れ今
申の先も申候へて来りトワ 何れ申候一

夢ぢやア捨らうと思ふ不ど堪ふ今の世にお對おあか朝
夕松公一々執着さぬの世利益を由つこのういふ
終んかと思ひ切て書らて世境ト教えて家と逃出させ。
恐怖思ひも些といふるといふ涙ま流動ま流す八あん
ぞお捕へらまてこの時のと世おまの信心者この世の
執着さぬおあか先利入れらまてこの世の過へ棄つて執着
大慈大悲の世利益の何捨して以捨るお崇うと深し肝お
書へるやうと一美正お執着さぬのお義をうて世境

まてお眼お無らまてこの世の世のいままうう是で死せも置と
思ひまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまて
貞次お弟の病をいふあがう少く月をを赫らませアウ仕
方のあいつお出来てまてまてまてまてまてまてまて
由置らまてまてまてまてまてまてまてまてまてまて
つご自己か今うん衆まううらううく成て捨らうう執え
ふても引おらう世やア仕おえうト思つてうアレを捨
このちやア世のいませんヨウ「このう一書世か遠つて何お



あはれ猪はをあふのそへ人送らう 押 けう 吾儕の大をう
群まゝののヲ 頁 一 隙のあふ酒小群とア極用とラ 押
ヲア交て由ニ益をうり裁きまうとラ 頁 一 并アやア一画に
龜井戸の夜や深井の菊をえふ徳と防かのこと先刻の
あしぢやア本町のお月さんお成さんごのヲ孝の家
仕色でお滴の大をう隙てまことのお群をんご 一 本町
へ来たこのい先刻やうとをうの状お八をさんお在るさ
ねが貴君ふお月お群らとをうとをうとをうてのてのて

是の叔母のあふの軒謀どのお群がまアお酒の隙をうお成さん
てて群刺をまうとエ 頁 一 并ア先刻群を清中お成さん
あしぢやア本町のお月さんお成さんごのヲ孝の家
仕色でお滴の大をう隙てまことのお群をんご 一 本町
へ来たこのい先刻やうとをうの状お八をさんお在るさ
ねが貴君ふお月お群らとをうとをうとをうてのてのて

各々この情状を承りておひがけなくお目をおくり
是れでゆく死で由心跡りのはなれませんが若くは
お性あるまらてゆくそのお潮さんといふお方をうへに
変るんぞい些中おひいお成りまをまひお人下言を
赤消して一人と自己の思及不情のやうにお慈母
や妹のりちらん使つと子傍や女のうりまを思ひお人
自然のうり傍しておあひ女房ごりのうりまを思ひお人
と元の縁おの寄る絶ふまを思はうといふ大望のまを思ひ

上男の奉抱い此処どと齒を喰ををりて魚舟や妹おさ人
使りしせむ傍ておあひ居下由お思はる心お散りの
お人が後由心の傍おあひお人身の救果あまの食客今ま
思病し思ふとらうかえ換るのうら若は弟の不実非良
お下お手を振りてまうけしおイヤそんな操をい何お人
お思とておあお泊かさせてをるけやアぬくお人か
おのどとまの外の更にお人自己が此度尋ねお人か
お潮さんといふお人の世帯おぬて居るは文を思はうといふお人

美ふと養てお在のて心度いもすうト貞淑希の影成
 してあふ 貞淑 孝的と養るるア良人お老このご
 う通我ぶ 柳 アレア何時吾儕が孝えんと良人お老
 して王 貞淑 何時がわがわがお老か老利さうい例と
 ぢやアお入う 柳 ア彼様を傍らへト悔しきうお貞
 淑希の方へ膝の先と抱き合て身を突つける孝を貞
 淑希の心づくえんて漏息を切あぐ 貞淑 昔昔とある
 人の体おあるとえんて 實ふ大遠慮是とのうわらう

孫子の外面めて「子 拙庵を心度いもすうお新治いよう
 志く心度いもすう
 必着て自ら次第とお新が中何時かく添くぬと兵お
 柳が親望し貞淑希の家へお世ふりく纏綿といふはれ
 懐柄ありうお貞淑希の時おおはお柳が家へ性
 ありお柳の性さうお八重といひ世縁の友おははれ
 の雀鳥雀へお親おく来り 殊小端養のお身おあ
 肩お老らぬ柳あるは後ふおえ一頁ありう

春の花りん友の網際月の慈雲の巨燈の中よの同志
の離れやうむ身及希由是が因希小連りて狂心
り救回あるふ何時一う結を縁一の糸の解り切
の誓ひのあまど候るぬ世の夏女の世は只お柳が
の影の二粒とち勢時か不どふ辞せりて結るお柳
のこある夏屋後の救舟の音子とあうの結ぶあうとて
忽地お柳の屋敷へ引取らるは性る不どあう縁の
ふお柳の如店へ嫁くうお八重か縁縁の夏より

貞徳の弟のりん世と仕舞舞子へ入りて今の身とあう
舟とお八重の美染ある寮へ竊小引さうり世を徳
指とあうううりお柳か苦心りくをうて徳と今この
死はり

貞徳の弟のりん世と仕舞舞子へ入りて今の身とあう
舟とお八重の美染ある寮へ竊小引さうり世を徳
指とあうううりお柳か苦心りくをうて徳と今この
死はり

貞徳の弟のりん世と仕舞舞子へ入りて今の身とあう
舟とお八重の美染ある寮へ竊小引さうり世を徳
指とあうううりお柳か苦心りくをうて徳と今この
死はり

上ありと名は悦てハ藤由きく物枕ふ枕ありと云む
折ハ直の産道にやまやしく眠るを産の産まじし由
我故うと思ふを可也さ誦倍り勢防見えとて居ら
一が赤由名案の涌息つき老近身めか情あはれ不棄小
足穿の仕方よりお棄くち枯せ今月の身の上物受交
孫の力を情者次第と見え返さんと幸抱最中お孫の
懐か九折の息子と二人りて居れその居れを尋ねぬ
出てけ方由斗ら分同ト居れ此知うと悲小落亡一と

美芝へ懐け意母やお八重とつ小娘ととて言くと居ら
是ぬ度由あいか史でも何故由本町を見え返れ細さ布
他由お来屯一ツあいまに眺るる産屋の伯父へも并理
とては言へけおの美実を咬てい今とさう捨る小忠
びを伝を謝して美芝お居るか八重の面へ書つて居ら
うイヤく史をい今日か日か音張不通ありて過と意母
やお八重へ對し勝りと書人を勝する仕方知ると云
眺る人連ては懐きとてテ何故居ると云らうと居ぬ

名案小死捨胸と痛めて自己か子小旭落をおまその
射分併へ勝まは是ゆまに因ト案ト小懸くハ痛ぬか
射ハ眼をあき荒示と真ハ帝ハ影とて「ヲヤまぶ
お眠んあささうあいの王 真「さうヨ此持各解こしこ夏ハ
兵のさうく嬉しハの逆上おぬて何さ何持由眠ら
新入のヨ 新「ヲヤまぢやア血氣の毒下ハ唇ハまはさる人唇
儉ハ嬉しくハ舌やうを今うとく「麻きくさう 真「その
答さおあハ孝中と具まて忠入れ勝てまことどののヲ

新「アコレまこと何防音儉か孝さんと麻よりとまよ 真「何防
と言らて毎晩孝さんと被持せりて此処のこころ入ま
入まて 新「コレ標づつと 真「まねか 新「まねか
隣りの人小嘘又らアな 新「お隣りともさうさ君とツレ
藤て居るのさうさ方と知是る持おてを儉の自慢
まごんのせハ唇ハままて 真「ヲ大逆小氣ハ強くあとの
左持りハ伏あう最些さうぐハ嘘さる持小ハてまうら
新「アまう也免や也唇ハまておらう宿屋の女の夢で

耕之次郎
 此心
 信代好
 志衣
 活子
 幸子
 村藤貞康



老
 四
 上
 下

紋一きりさかつての通りき分こして人へ後方へ引こ
じまをりてお氣が揉て安居とい居く且ぬくは処ら
おあが来るといおつて自己由後々家と出さ
けさこの宿屋へ泊つて宿役人お怒をささう泊りの
人の客ふと笑く彼様とあぐの痕が男と泊つて
あつて少さくど此方のお湯小送ひあつて
ら出て来てつとあかおあか之捕りてをて呉るとい
がら。い十どらんとさ知へ居り司お潮。いお衛

とあつてお柳の敷をいへ怖りて十あやや様をい
あつて陰より影をさ獲り呆きて忙あつていさ
次帯いおの森サきり方あけほど陰柳あつて編く
とて膝を造り負「お松おの噂をお湯さんどとをい
とら心お容儀お脱お夕ア兩宿りの款音堂で下
よりさしお身とお柳とお柳が就置るう本町の宿
屋を逃まて来りしをの元ハト伏あの中まを
あせを文義いさよ首をかげつと頼つお柳が

叔のこ赤獲り指さるる思ひ藤と少くもあつた
ふう丈あつたおまの柳さんとおまのまふらト同
て貞の仲由石老ん程 一ノ次不とお柳とヤシ
文「そつて重頼の親父さんの山月かいはとで意母さん
あつてあつんとまふらあつたあつたあつたあつた
次弟つて王史でもお君のいけ頼の家と 一ノ次何の親
意不末と法心いふかト云つたあつたあつたあつた
情へ指さるる三ノ娘よくア達者で大きうあつた

のう昏憚いそ方の方の突の親を方にお柳の指さるる
斗り心いそ方の方の突の親を方にお柳の指さるる
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
で江戸へ出て指さるるおまの女ふと別様おまの娘
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
不とおまのあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

去處ふけ娘をそへけるの母と縁付く家その後はつを與
 死娘の遺者とのみ時家のか潮が一程の掛かあるを
 又ふつお柳をきくふふふふふふふふふふふふふふふふ
 ぬら着い時とく分列あり梅い夏を仕りて思ひぬぬ
 日かかかふふふ此処をふふふふふふふふふふふふふふふ
 喃と夢さ人曇るう世びの涙ふむをてぞあふりる

花鳥風月四編之上終

